

## 場所に関する感情と観念 —辛酸なめ子の表現の原点を探る—

緒 方 泉

辛酸なめ子というエッセイスト、漫画家、作家がいる。

辛酸をなめる、という意味からくるペンネームそのままが彼女の表現上のスタンスで（自虐的な語り口調、また常に慎ましく低姿勢という形をとりながら）人、者、社会を切りこんでいくというのが彼女の世界だ。

その中でも私が特に注目したのが、彼女の地場に関する表現だ。現在、某週刊誌でも様々な場所、新しくできたスポットに足を運び取材をもとにコラムを執筆中の彼女だが、その発送、表現は実に異能である。

特に、彼女の地元さいたま、埼京線に焦点を当てたものが多く、執着しているといっても過言ではない。

今までも、地場を面白おかしく語る作家、エッセイストはたくさんいた。が、辛酸なめ子の

ように、場所の微妙な感覚を的確に表現をし、読者の賛同を得ると同時に、焦点を当てた場所、空間に、更に、独特の意味や価値を与えるような文章を書く作家はいないように思われた。

それでは、彼女の何が場所にどのような特別な意味を与えているのだろうか？ 本稿では、彼女の表現ルートを探ることを目的とし、辛酸なめ子の文献を洗い、彼女の経験をたどった。その結果、厳格な両親のもとに育ち、中高一貫の女子学校（ミッションスクール）で多感な時期を過ごしたことが大きな要因となり、彼女の地場に関するその独特な感性が生まれたということがわかった。

よって、場所に関する感情と観念は、空間と場所に関する感情と観念は、その人生の多様な経験を通してつくられていくということがわかった。

## 景観とは何か —北鎌倉におけるマンション問題をもとに—

沖 山 郁 子

日本の町並みは、戦後の復興や高度経済成長、バブル後の再開発などにより、大きく変化し続けてきた。従来は、法律上問題がない限り、住民らが開発や計画を中止させることは極めて困難であったが、国立マンション論争や、景観法の施行などのように、景観に関する新たな動きも出てきている。特に、従来の条例や要綱に比べ、法的な根拠が強く、地域にあった景観作りが可能となる景観法の影響は大きいと思われる。

だが、一口に景観作り・まちづくりとは言っても、ディベロッパーや住民、行政などそれぞれの立場によって理想とするもの、目指すものは異なり、様々なズレも生じている。各地で景観に関する論争や闘争が絶えないのも、景観や町並みといったものに、一つの決まった形がないからではないだろうか。

本論文では、北鎌倉で実際に起こったマンション論争をもとに、住民、ディベロッパーの双方の主張を追い、何が対立し問題となっているのかを明らかにすることを目的とし、一つの景観が出来上がっていくまでの合意の過程を探った。

フィールドとなった鎌倉市は、住民運動の走りとも言われる「御谷騒動」以来、様々な条例や要綱を打ち出し、住民によるまちづくりに力を入れてきた。本論争でも、住民の一代表として論議にあたった北鎌倉まちづくり協議会に着目した。協議会は、計画そのものに反対するのではなく、景観論争を前面に出し、独自の計画案提示や具体的な要望提案、マスコミを利用してのネットワークづくりなど、住民としてまともに協議にあたり、粘り強い努力を続けた。

最終的には事業者側の主張が通ったことになるが、話し合いは一応の決着を見ることができた。景観に関する取り組みが全国的にも広がり

を見せているが、住民自身の意識の高さや団結があって初めて、町並みや景観を守る法的な仕組みが生きてくるのだと強く感じた。

## 都市の中のママチャリ —家事・育児の手段としての視点から—

田 中 茜

自転車は世界各国で年齢・性別を問わず幅広く利用されており、生活の中で最も身近な乗りものである。日本で自転車というと、大半の人がいわゆる“ママチャリ”と呼ばれている自転車を思い浮かべるだろう。本論文ではまず文献調査により、ママチャリの成立過程とママチャリが日本に普及するに至った経緯を把握し、現在のママチャリが子どもを乗せる用途においてさらなる進化を遂げつつあることに注目した。ママチャリは自家用車を持ちにくい都市内の生活者にとっては、家事・育児の手段としてなくてはならないものとなっている。一方、自転車利用者をとりまく都市環境は整備されているとは言いがたいのが現状である。幼児同乗時のママチャリ事故の増加は各メディアでも取り上げられ、幼児用ヘルメット利用を推進するキャンペーンが各地で行われている。しかし、前後に幼児を乗せた上、荷物も積んで走行する危険なママチャリも少なくないという現状がある。一部のママチャリ利用者がそのような危険な利用状況になっている要因を明らかにするため、自転

車利用率と自転車事故数が都内でも顕著な足立区の保育園において、保護者を対象にアンケート調査を行った。アンケートの結果から、仕事を持つ子育て中の母親にとって、本人が使用できるクルマの有無と祖父母等による子どもの世話の有無により、生活の中における自転車の重要度は異なってくることがわかった。クルマがなく祖父母等による子育て支援が受けられない状況の母親において、ママチャリ利用状況はより逼迫したものになる。過積載・複数乗せを減らすための子育て支援システムの確立が望まれる。また、幼児同乗時の走行に何らかの危険を感じつつも、ヘルメット使用には至らないママチャリ利用者が大半を占めることがわかった。転倒事故による乳幼児の負傷を防ぐためにも、保護者への情報周知と注意喚起が充分になされる必要がある。また、ヘルメット使用を促すため、ヘルメット代金の補助施策や幼稚園・保育園でのレンタル体制の導入など、行政側と育児施設側との連携が必要になってくる。

## 地域をつなぐ生ごみ資源の可能性 —東京都北区と群馬県甘楽郡甘楽町の生ごみリサイクル事業から—

田 中 順 子

— (フルペーパーを別に掲載した) —